

強弱アクセントによる母音の変化

— 英語話者による中級レベルの日本語の場合 —

稲葉 みどり

I. はじめに

英語話者が日本語を発音する場合には、さまざまな母語の干渉が考えられる。その中で英語話者が日本語を発音するとき、英語と日本語のアクセント形式の違い（小栗1977, p.117）から、日本語の「高低アクセント（pitch accent）を、英語の「強弱アクセント（stress accent）」で置き換えて発音する傾向がある。これは、金田一（1963）、堀口（1973）、土岐（1980）で詳しく論じられている。また、日本語と英語の音声の共通点、相違点についても、服部（1951）をはじめとする多くの先行研究で論じられてきた。

本稿では、英語話者が日本語の高低アクセントを強弱アクセントに置き換えて発音した場合の前後の音節への影響、特に母音の曖昧化を中心に日本語学習者に調査し、実際にどのような傾向があるかを分析する。

II. 研究の方法

英語を母語とする日本語学習者（アメリカ人）の日本語を録音し、英語話者の日本語の発音の特徴が先行研究で述べられているものと実際に一致するかどうか調べる。さらに、先行研究で述べられていること以外にも特徴がないかどうかを考察する。

調査は英語を母語とする日本語学習者のうち、中級レベルの者を対象に行う。中級レベルの学習者を対象とする理由は、母語の干渉が少しおさまった時期（土岐1980）とされ中級になってもなお見られる発音の特徴を調査するためである。

Ⅲ. 調査の概要

1. 音声資料の収集

音声資料は、英語を母語とする日本語学習者（アメリカ人）15名に日本語の教科書を音読してもらい、それを録音したものを使用した。音読は口頭試験という形で行なったので、同一条件の下で資料の収集が可能となった。また、被験者は十分練習を重ねたうえで臨んでいるが、それでも発音の難点、特徴が残っている（川口1984, p.38）。

2. 被験者

南山大学で中級レベルの日本語を学んでいるアメリカ人留学生を被験者とし、その概略は次のとおりである。

被験者 英語を母語とするアメリカ人

人数 15名

レベル 中級（9月～12月で初級後半を終え1月から中級に入った者）

調査時期 中級コース開始後、2週間目の1990年1月22日（月）

学習歴 アメリカで初級前半を終了し、1989年9月に来日し、1990年1月から中級に入った者 13名

アメリカで初級を終了し、1990年1月に来日し、中級に入った者 1名（被験者番号 13番）

1989年9月に来日し、12月に初級前半を終了し飛び級して1990年1月から中級に入った者 1名（被験者番号 14番）

教科書 Current Japanese, Intercultural Communication : 1987
Yoshiko HIGURASHI, Bonjinsha

3. 調査文 （／）は原文改行箇所（教科書 3頁3行目～5行目）

しかし、だれからもお返しの年賀状は年内には来なかった。／驚いたことに、一月に入ってから返事が来た。そして、さらに驚いたことに／は、返事の中には一月の十日過ぎに着いたものがあった。

AからEまでの5か所（5項目）を分析の対象とした。

4. 資料記述の方法

言語資料の記述には、次のような方法を用いた。

- (1) 学生には1～15の番号を付け、調査箇所を音声記号化したものを音声表(1), (2) (資料) にまとめた。
- (2) 音声記号はIPAを用いる。
- (3) アクセント記号は、強弱アクセントの第一アクセントを「^ˈ」、第二アクセントを「^ˌ」で記し、高低アクセントは「[˥]」などで記すものとする。
- (4) 「[˜]」は二重母音化の記号とする。
- (5) その他の表記については、音声表(資料)に記した。

IV. 先行研究

英語話者が日本語を発音する際に、強弱アクセントを持ち込む傾向があることは先に述べた。その場合に起こると予想される強勢のない音節（以下、弱音節 (weak stressed syllable) : 小栗1969, p.177) への影響に関して、先行研究では次のような点が指適されている。

堀口 (1973, p.97) は「日本語では一般的にいて各母音は同じ明瞭度で発音されるが、英語国民が日本語に強弱アクセントをもちこめば、stressのある音節を発音するのに要する時間は大体において長いから、stressのない音節の母音はあいまい音になると予測される。」と述べている。

また、天野・大坪・水谷 (1983, p.198) は「アメリカ人などにとって日本語の『エ』と『ア』を単音として区別することはなんでもないことである。しかし、長い音節連続の中で、弱強勢をつけて発音すると、「ア」も「エ」もあいまいな「ə」になってしまいがちである。その結果、『勉強してから来ました。』と『勉強したから来ました。』の区別がふめいりょうになりがちである。」と述べている。ここでも英語話者が日本語の高低アクセントを強弱アクセ

ントに置き換えた場合には、強勢のない音節の母音は、曖昧母音「ə」に変化することが指適されている。また、今田（1981, p.29）にも同様の記述が見られる。

本稿では、英語を母語とする日本語学習者の発音を調査し、結果を先行研究と照らし合わせながら、実際にどのようなことが起こっているかを分析していく。

V. 結果と考察

1. 考察の手順

Ⅲ-3 で示した調査文中の5項目、A（「だれからも」）、B（「来なかった」）、C（「入ってから」）、D（「来た」）、E（「着いた」）について、次の3つの点を中心に考察を進める。

- (1) 強弱アクセント（強勢）をおいたものについて、その位置と件数。

本稿では、第1アクセント（primary stress）がおかれる位置が第1音節の場合、第2音節の場合、第3音節の場合に分類し、母音の変化を見る。

以下、「強勢」「強弱アクセント」とは、第1アクセントを指すものとする。

- (2) 強弱アクセントをおいた場合、その前後の音節のどこで母音の変化（曖昧母音「ə」化）が起こっているか。または、前後両方の音節で母音の変化が起こっているか。
- (3) 曖昧母音化以外の変化や発音の特徴はないか。

2. 調査文A【「だれからも」[daʔekaʔamo]】の結果と考察

第1音節に強アクセントをもってきた場合（[dáʔekaʔamo]）は15件中3件（20.8%）、第2音節に強アクセントをおいた場合（[daʔékaʔamo]）は15件中9件（60.0%）、残りはその他のアクセント形式（音声表(1)参照）で発音されており、「だれからも」というように平板アクセントで正しく発音されていたものはなかった。

調査文Aでは、日本語の高低アクセントが強弱アクセントで置き換えられてお

り、日本語の平板アクセントは見られなかった。これは、土岐（1980）で指摘されている、英語話者には平板アクセントは難しいということと一致している。

これらの強弱アクセントの位置と前後の音節の母音の変化をまとめると次のようになる。

(1) 第1音節に強勢をおいたもの（[dáfekaɸamo]）

15件中3件（20.0%）：被験者番号 1, 11, 13

この中で、第2音節（強勢の直後）の母音[e]が、曖昧母音[ə]に変化しているものは見られなかった。

3件中0件（0%）

(2) 第2音節に強勢をおいたもの（[daɸékaɸamo]）

15件中9件（60.0%）：被験者番号 2, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 12

(2)-(a) この中で第1音節（強勢の直前）の母音[a]が曖昧母音[ə]に変化したもの（[dəɸékaɸamo]）

9件中1件（11.0%）：被験者番号 7

(2)-(b) この中で第3音節（強勢の直後）の母音[a]が曖昧母音[ə]に変化したもの（[daɸékəɸamo]）

9件中9件（100%）：被験者番号 2, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 12

(3) 第3音節に強勢をおいたもの（[daɸekáɸamo]）

15件中2件（13.0%）：被験者番号 14, 15

この中で、第2音節（強勢の直前）、第4音節（強勢の直後）の母音に曖昧母音化が起こったものは見られなかった。

2件中0件（0%）

ここで、第3音節に強勢をおいた2件のうち一件（被験者番号14）は第4音節の[ɸa]が脱落し、[daɸekámo]となっていた。この場合、「だれからも」は「だれかも」のように聞こえた。

以上から、調査文Aについては、強弱アクセントにより強勢の前後の弱音節の母音に曖昧母音[ə]化が起こっていることが分かった。これは、先行研究（堀

口1973, 天野・水谷・大坪1983, 今田1981) で述べられている事実と一致する。

さらに、母音の変化(曖昧母音化)は強勢のある音節の直前の音節よりも、強勢の直後の音節のほうに起きている場合が多く、(2)-(b)では9件(100%)という結果を得た。

3. 調査文B【「こなかった」[kónakatta]】の結果と考察

第1音節に強勢をおいたもの、第2音節に強勢をおいたもの、第3音節に強勢をおいたものそれぞれが見られ、高低アクセントで「こなかった」のように正しく発音されたものはなかった。詳細は次のとおりである。

(1) 第1音節に強勢をおいたもの ([kónakatta])

15件中4件(26.7%) : 被験者番号 1, 9, 10, 14

この中で、第2音節(強勢の直後)の母音[a]が、曖昧母音[ə]に変化したもの([kónəkatta])

4件中3件(75.0%) : 被験者番号 1, 9, 10

(2) 第2音節に強勢をおいたもの ([konákatta])

15件中4件(26.7%) : 被験者番号 2, 3, 5, 7

(2)-(a) この中で第1音節(強勢の直前)の母音[o]が曖昧母音[ə]に変化したもの([kənákatta])

4件中1件(25.0%) : 被験者番号 2

(2)-(b) この中で第3音節(強勢の直後)の母音[a]が曖昧母音[ə]に変化したもの([konákətta])

4件中2件(50.0%) : 被験者番号 2, 7

(3) 第3音節に強勢をおいたもの ([konakáttta])

15件中4件(30.7%) : 被験者番号 4, 8, 10, 13

(3)-(a) この中で第2音節(強勢の直前)の母音[e]が曖昧母音[ə]に変化したもの([konəkáttta])

2件中1件(50.0%) : 被験者番号 8

(3)-(b) この中で第4音節(強勢の直後)の母音[a]が曖昧母音[ə]に

変化したもの（〔konakáttə〕）

2件中1件（50.0%）：被験者番号 13

(2)-(a)の場合は、日本語では「かなかった」、(3)-(b)の場合は「こなかて」のように聞こえる。

以上、「こなかった」の強勢の位置と強勢のない音節の母音変化について見てきたが、強勢のある音節にも曖昧母音〔ə〕が現れていた。（〔kónakatta〕）

15件中5件（33.3%）：被験者番号 7, 8, 10, 13, 15

堀口（1973）では、強勢のある母音には曖昧母音は現れないと述べられているが、今回の調査では、第1音節に強勢をおいた場合にこれが見られ、結果として「こなかった」は「かなかった」のように発音されている。

4. 調査文C【「はいつてから」〔háittekaɸa〕】の結果と考察

第1音節に強勢をおいたものが15件中15件で、第2音節、第3音節に強勢をおいたものは見られなかった。

ここで、調査文Cを見てみると、第1音節は〔ai〕という母音連続で構成されている。服部（1951）によれば、〔ai〕は日本語の二重母音と考えられ、音節主音は〔a〕、音節副音は〔i〕で、日本語においては〔i〕のほうが弱く発音される。英語の二重母音〔ai〕も同様に〔i〕を副音とするのだが、今回の調査では、二重母音〔ai〕の〔a〕に強勢をおいた場合と、〔i〕に強勢をおいた場合が見られたので、ここでは、この二つの場合を別々に考察する。

(1) 第1音節の〔a〕に強勢をおいたもの（〔háittekaɸa〕）

15件中7件（46.7%）：被験者番号 3, 5, 8, 9, 11, 12, 13

(1)-(a) この中で、強勢の直後の母音〔i〕が曖昧母音〔ɪ〕に変化したもの（〔háítekaɸa〕）

7件中2件（28.6%）：被験者番号 3, 9

(1)-(b) この中で第2音節の母音〔e〕が曖昧母音〔ə〕に変化したもの（〔háittəkaɸa〕）

7件中3件（42.8%）：被験者番号 5, 8, 9

(1)–(a)の場合は、後続母音の [i] が弛緩音 [ɪ] に変化し、さらに、[ɪ] が弱い場合は「い」が脱落し、「はたから」のように聞こえたり、強勢のある音節が強く長く発音された結果、促音が入って、「はったから」のように聞こえたりする。

(2) 第1音節の [i] に強勢をおいたもの ([hãittekafã])

15件中8件 (53.3%) : 被験者番号 1, 2, 4, 6, 7, 10, 14, 15

(2)–(a) この中で第1音節の強勢の直前の母音 [ã] が曖昧母音 [ə] に変化したもの ([həittekafã])

8件中2件 (24.0%) : 被験者番号 7, 10

(2)–(b) この中で第2音節の母音 [e] が曖昧母音 [ə] に変化したもの ([hãittəkafã])

8件中1件 (12.5%) : 被験者番号 7

以上、母音の曖昧化により、「テ」[te] が「タ」[ta] に聞こえたり、「て」と「た」の区別がしにくくなったりしている。従って、「はいつてから」は「はいつたから」のように聞こえる。

5. 調査文D【「きた」[kitã]】の結果と考察

日本語の高低アクセントで正しく発音したものはなく、15件中15件とも第1音節に強勢をおいていた。この場合第2音節「た」[ta] の母音に曖昧母音 [ə] 化がみられたものは、1件だけであった。詳細は以下のとおりである。

(1) 第1音節に強勢をおいたもの ([kitã])

15件中15件 (100%) : 被験者番号 1~15

この中で第2音節(強勢の直後)の母音 [ã] が曖昧母音 [ə] に変化したもの ([kitã])

15件中1件 (6.0%) : 被験者番号 1

(2) 強勢のあとに促音を持ち込んだもの ([kittã])

15件中9件 (66.6%) : 被験者番号 1, 2, 6, 9, 11, 12, 13, 14, 15

多くの場合曖昧母音化の代わりに、第1音節に促音化が起っていた。その結

果、日本語では「きた」が「きった」のように聞こえるものが多かった。

英語の場合、強勢のある音節は強く長く発音される（天野・水谷・大坪1983, p. 188）ので、[i]に強勢をおいた箇所が非常に長くなり、日本語の促音のように聞こえるのではないかと考えられる。

6. 調査文E【「ついた」[ts[̣]ũ[̣]ita]】の結果と考察

第1音節に強勢をおいた場合（[ts[̣]ũ[̣]ita]）と、第2音節に強勢をおいた場合（[tsũ[̣]ita]）があった。ここでは「ついた」[tsũ[̣]ita]の[ũ]を[u]で発音していたものが多いが、この点については今回は区別しないことにする。

以下、[ũ]（第1音節）に強勢をおいたものと、[i]（第2音節）に強勢をおいたものについて、順に母音の変化を考察する。

(1) 第1音節[ũ]に強勢をおいたもの（[tsũ[̣]ita]）

15件中6件（40.0%）：被験者番号 1, 3, 5, 6, 10, 14

この中で第3音節の母音[a]が曖昧母音[ə]に変化したもの（[tsũ[̣]itə]）

6件中4件（66.6%）：被験者番号 5, 6, 10, 14

この場合は[tsũ[̣]ita]の[ũi]を一音節化して二重母音[ui]のように発音しているものが多く、その場合の後続の音節の母音の曖昧化は第3音節の[tsũ[̣]ita]の[a]に起きている。

(2) 第2音節[i]に強勢をおいたもの（[tsũ[̣]ita]）

15件中7件（46.6%）：被験者番号 4, 7, 8, 9, 12, 15

(2)–(a) この中で第3音節の母音[a]が曖昧母音[ə]に変化したもの（[tsũ[̣]itə]）

7件中2件（28.5%）：被験者番号 8, 9

(2)–(b) [ũ]または[i]強勢をおいたため、この音節が一拍より長くなり、促音がはいつて、日本語では「ツイッタ」のように聞こえるもの。

（[tsũ[̣]itə]）

15件中5件（33.3%）：被験者番号 1, 2, 8, 9, 15

ここで、強弱アクセントによる弱音節への影響として、曖昧母音化だけではな

く、促音化も見られるという結果を得た。

VI. まとめ

以上、英語を母語とする日本語学習者（アメリカ人）の強弱アクセントによる強勢の前後の母音の変化を5項目とりあげて調べてきた。サンプル数としては、これで十分とは言えないが、以下に調査結果をまとめる。

1. 強弱アクセントによる強勢のない音節の母音の曖昧化はかなり多くみられ、先行研究と一致した。

本調査は、15名の被験者について、それぞれ5項目を調査の対象としているので、のべ調査件数を75件と考えると（一つの調査箇所内の変化は1件と数える）、高低アクセントを強弱アクセントで発音したものの件数(割合)は、75件中71件（94.6%）という結果を得た。

また、この中で強勢をおいた音節の前後の音節の母音が、曖昧母音 [ə] 化していたものは、71件中31件（43.6%）と非常に多く見られた。

2. 先行研究では、曖昧母音化が起こる位置が強勢の前の音節なのか、後の音節なのかに関しては詳しく述べられていない。しかし今回の調査では、第2音節、第3音節に強勢をおいたもの23件の中で、強勢の前の音節が曖昧母音化したもの3件（13.0%）、強勢の後の音節が曖昧母音化したもの14件（60.8%）という結果を得た。前後の音節が曖昧母音化した例は1件と少く、残り5件には曖昧母音化は見られなかった。

英語のアクセント体系では、英語は3音節以上の語の場合、第1アクセントのある母音の前後の音節の母音は曖昧母音になる傾向がある。よって英語話者が日本語を発音した場合には、強勢の前の音節よりも、後の音節の母音に曖昧母音化が起こる傾向が多いことが本調査の結果から明らかになった。

3. 強弱アクセントによる前後の音節の母音の変化は、曖昧母音 [ə] だけでなく、弛緩音 [ɪ] が2件（V. 4. 「はいつてから」の項目参照）見られた。

4. 強弱アクセントの後に、促音を持ち込む例が75件中14件（18.7%）見られた。これは英語の場合強勢のある音節は、強く長く発音されるので、日本語では、促音が入ったように聞こえるのではないかと考えられる。特に、これは「きた」「ついた」の2か所について見られた傾向であるが、この二つは強勢の後に続く子音が歯茎破裂音[t]なので、これを発音する際必要な声門閉鎖の影響も考えられる。この点については今後の課題である。
5. 強勢のある母音には、曖昧母音化は現れない（堀口1973）と述べられているが、今回の調査では現れていたもの（V. 3. 「こなかった」の項目参照）が5件あった。

VII. おわりに

今回の調査は中級の日本語学習者（英語話者）について母語の影響がどのようにその発音に影響しているか調査したものであるが、発音の傾向は学習者がどのような指導をどういう時期に受けたか等、学習環境に左右されることも十分考えられる。今後はこの点についても考慮に入れて、研究を進めていきたい。

参 考 文 献

- 天野寧・大坪 一夫・水谷 修 (1983) 『日本語音声学』, くろしお出版
- 今田 滋子 (1981) 『教師用日本語教育ハンドブック⑥発音』, 国際交流基金
- 大坪一夫・水谷 修 (1971) 『日本語教育指導参考書 1, 音声と音声教育』, 文化庁
- 小栗敬三 (1977) 『英語音声学』篠崎書林
- 川口義一 (1984) 『発音と聴解の指導－上級レベルでの問題点』, 講座 日本語教育第20分冊 早稲田大学語学研究所
- 城生佰太郎 (1988) 『音声学 新装贈訂版』アポロン音楽工業株式会社
- 金田一春彦 (1963) 『発音から見た日本語』日本語教育 3号
- 土岐哲 (1980) 『英語を母語する学習者におけるアクセントの傾向』アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要 2
- 服部四郎 (1984) 『音声学』, 岩波全書
- 堀口純子 (1973) 『英語国民による日本語の四音節名詞アクセントの予測と実際』日本語教育19号
- Geoffrey K. Pullum and William A. Ladusaw (1986) Phonetic Symbol Guide.
TheUniversity of Chicago Press
- J. C. Catford (1988) A Practical Introduction to Phonetics. Oxford
University Press

資料

音 声 表 (1)

1. 1～15は被験者番号
2. 13番は初級から飛び級した者, 14番は1990年1月に来日した者
3. 被験者が言い直した場合は, 言い直した方をとることにした。
4. 表記上の注意

アクセントの母音の変化を中心に音声記号化し, 子音については細かい表記はしなかった。[kʰ]は口蓋化された[k]を表す。

	A だれからも [daɾe ^h kaɾamo]	B こなかった [kɔnakatta]
1	[dā ^h ɾekəɾəmoʊ]	[kɔnəkattə]
2	[daɾé ^h kaɾamo]	[konákəttar]
3	[daɾé ^h kaɾəmo:]	[konákatta]
4	[daɾé ^h kaɾəmo:]	[konákáttar]
5	[daɾé ^h kaɾəmo ^w]	[koná káttar]
6	[dāɾe ^h kaɾamo]	[konákáttar]
7	[dəɾé ^h kaɾəmoʊ]	[kənəkəttər]
8	[daɾé ^h kaɾəmoʊ]	[kənəkəttər]
9	[daɾé ^h kaɾəmo:]	[kɔnəkattar]
10	[daɾé ^h kaɾə:mo ^w]	[kɔnkáttar]
11	[dəɾé ^h kaɾəmo]	[konákatta]
12	[daɾé ^h kaɾəmo:]	[konákəttar]
13	[dāɾekərá:mo]	[kɔnəkəttər]
14	[daɾeká:aməʊ]	[kə:nəkəttər]
15	[daɾekáɾa:mo:]	[kɔnəkattə]

音 声 表 (2)

	C はいってから [hãittekaɾa]	D きた [kʲi̯ta]	E ついた [tsũita]
1	[hãittekaɾa]	[kʲi̯t]	[tsũit]
2	[hãi̯tekaɾa]	[kʲi̯ta]	[tsũite]
3	[hãl̥tekaɾa]	[kʲi̯ta]	[tsũita]
4	[hãitte kaɾa]	[kʲita]	[tsũita]
5	[há ttekaɾa]	[kʲi̯ta]	[tsũitə]
6	[hãittekaɾə]	[kʲi̯ta]	[tsũitə]
7	[hãittəkəɾaʳ]	[kʲi̯taʳ]	[tsũitaar]
8	[hãl̥ttəkəɾə]	[kʲita]	[tsũi̯təʳ]
9	[hãl̥tekaɾə]	[kʲi̯ta]	[tsũitə]
10	[hãittəkəɾaʳ]	[kʲi̯taʳ]	[tsũitəʳ]
11	[hãi̯tekaɾa]	[kʲi̯ta]	[tsũite]
12	[há ittekaɾa]	[kʲi̯ta]	[tsũitar]
13	[hãittəkəɾa]	[kʲi̯ta]	[tsũitaʳ]
14	[hãittekaɾa]	[kʲi̯ta]	[tjũittəʳ]
15	[hãitte kaɾa]	[kʲi̯ta]	[tsũi̯te:]

(いなば みどり 日本語文化)